

38

ユートピア論とエコロジー思考に関する一考察

鈴木 邦雄・小林ちえみエレナ

AN ANALYSIS OF THE UTOPIAN AND ECOLOGICAL THEORIES

Kunio SUZUKI and Helena Tiemi KOBAYASHI

生態環境研究 第2巻 第1号 35~43頁 (1995年9月) 別刷

ECO-HABITAT: JISE Research Vol. 2 No. 1 p. 35-43 September 1995 (Reprint)

ユートピア論とエコロジー思考に関する一考察

横浜国立大学経営学部

鈴木 邦雄

横浜国立大学大学院国際開発研究科 小林ちえみエレナ

AN ANALYSIS OF THE UTOPIAN AND ECOLOGICAL THEORIES

Kunio SUZUKI,

Faculty of Business Administration, Yokohama National University, Yokohama 241, Japan

and

Helena Tiemi KOBAYASHI, *Graduate School of International Development,*

Yokohama National University, Yokohama 241, Japan

Synopsis: Today, as the earth's environment ecological problems are beginning to become social problems as well, the issue of defining a new utopian theory is increasingly important. The ecological theory tells us that it is possible to interpret and define processes and systems of sustainability and development for living beings, including those of humans.

The understanding basic concepts of Ecology, as a field that works both with living creatures, the environment, and its relations is a prerequisite for developing this theory. In this paper, we discuss classic utopian thought, as roots of ecological thought, which can be considered a modern edition of the classic utopian theory.

Key words: Ecology, Utopia, Enterprise administration, Corporate philosophy, Organizational behavior.

はじめに

総理大臣の諮問を受けていた21世紀地球環境懇話会(近藤次郎座長)は、1年に及ぶ討議を経て、答申「新しい文明の創造に向けて—21世紀地球環境懇話会提言—」を提出している。答申提出があつたのが阪神大震災の起きた平成7年1月17日であったために注目されなかったが、地球環境問題に対する新しい理念を示し、答申では生態学の基本的概念ともいえる生態系保全の思想(自然との共生と調和)、循環の思想(発生の抑制とリサイクル)からなる「地球環境倫理」を提唱している。「現在の物質文明の礎となっている価格観や価値体系を『地球環境時代』ともいふべき新しい時代を視野に入れて根源的に問い直すとともに、新しい時代にふさわしい新たな文明思想を構築していくことが不可欠である」としている。このことから、地球環境問題が大きな社会問題となっている今日、現代ユートピア論を展開する必然性があり、問題の解決・解消に向けた新たなパラダイムすなわちエコロジー思想の検討が必要となっている。エコロジー思想は、基本的に、「人間を含めた

生き物の存続と発展(進化)をもたらすメカニズムの解釈」と定義することができ、環境と生き物との関係を扱う学問分野すなわち生態学の基本的概念に対する理解が前提となっている。

本論文は、現代ユートピア論とも言えるエコロジー思想のルーツとなっている古典的思想ユートピア論について検討し、さらに文明思想としてのエコロジー思想の方向性と可能性についても考察している。

ユートピア論からみるエコロジー思想

都会でバリバリと働くサラリーマン、発展途上国の森林で木を伐採して自らの住まいを作り上げる人、自分のテーマに没頭する研究者、様々な表現を試みる芸術家、絶妙の味を追求する料理家。彼らに共通する世界は、小さなユートピアである。ここでわざわざ「小さなユートピア」という言葉を用いたのは、大多数の人間は意思を持って体と心を動かす時、その背景に多くの場合、自らの小さな夢やその人の理想を抱いているためである。自分の小さなユートピアは実現可能かもしれ

ないが、ユートピアという言葉自体は意識的に避けられている。しかし、われわれと異なった200年前の社会状況を体験した人たちにとって、ユートピア論は、時代の「進歩」を代表するセオリーであった。佐伯(1993)に言わせると『『進歩』は、過去に対する現在の優越を主張する。……(中略)……同時にそれは、未来に対する現在の欠陥を指摘する』(p. 232)。つまり、ある時代を代表し、社会に少なからざる影響を及ぼした思想は、その時代の終わりと共に役割を終え、影になっていく運命にあることを意味している。

しかし思想たるものは、不動ではなく、時間的にも空間的にも常に動いている。ひとつの社会に当てはまらなくなってしまった思想でも、多くが人々によって加工され、徐々に変化する過程を経て、何らかの形で生き残っている。ユートピア的な世界を約束する宗教等は、その一つの表れであると解釈できる。また、ある国から別の国へと思想が移転されていくことも少なくない。それは開拓時代ではヨーロッパの大都市から新しい植民地へ、現在は企業の本社がある先進国から子会社がある途上国へと思想の流れが続いている。ヒトの移動はつねに思想の移転を伴うという考え方もあるが、近未来ではヒトの移動を伴わない、情報伝達のみによる思想の移転・伝播も行なわれることが予測されている。

現代のエコロジー思想を論じる前に、古典的ユートピア論の中核となっている、以下の思想家達考え方の概略を紹介する。

トマス・モアとユートピア Sir Thomas More (1478-1535)

トマス・モア(イギリス政治家、聖人)がどこにもない国、『ユートピア UTOPIA』を書き上げたのは1516年であった。モアは正義ある社会に関する自らの夢について語り、その結果としてモアはユートピア社会主義の父と呼ばれるようになった。

モアのユートピアは、理想的な社会・経済組織をもつ国家、人間にふさわしい生活様式と、労働者の兄弟愛的な完全な倫理観を保証する能力のある生産関係をもつ国家建設の試みである。その国では、私有財産制がなく「すべてが共有であり、したがってそこでは、すべてが少数の者の欲望のためであるのではなく、ただ正義、平等、共同社会の維持のためにある」。正に崩壊した東欧諸国の「実験」を連想させる内容である。

ユートピア島で行われる経済的活動は、おもに手工業である。人間は共同生産に皆参加することを義務づけられ、さらにもう一つの専門職を身につけなければならないことになっている。国家の役割は、生産の計画を立てること、および生産された品物の配分を行うことである。おもな品物は手工業品と農業作物であり、それは人々の必要性に応じて配分されるのである。ユ-

トピアを考えたモアは、社会的寄生者(働かないほとんどの女性、牧師および修道士、金持ち、病気を口実に怠惰に身を委ねる乞食)の絶滅をも意味していた(オシノフスキー、1990他)。

モアには、技術的進歩は決定的な意義をもたなかった。モアのレンズを通して現代社会を分析してみよう。彼は今の時代を生きていたならば汚染する工場をすべて停止させ、みなに手作業を強いたであろう。しかし文明の便利な生活に慣れている私たち、そしてモア自身でさえ発展の結果を目の前にして、抵抗できなくなっていかもしれない。技術が作り出した世界の流れは本質的に不可逆的であり、人間社会の複雑な利害関係網に化して具現される。必要によって生み出された技術は、各過程に応用されやすいように加工され、社会における生産活動の規模の経済のために貢献してきている。地球環境問題の解消に向けて提唱されている“Small is Beautiful”の考え方は、技術の現代的拡大志向に対して出てきたものであるが、技術を否定する考え方を含んではいない。

十六世紀における小規模の農業経営や製造業(例えば毛織物製造業者)は働き過ぎ(過剰な就労時間)の問題を抱えていた。親方たちは職人や従弟たちの就労時間を延長させ、それが一日に12時間から15時間まで達していたのである。それに対抗する形でモアのユートピア人は朝の9時から午後5時まで休憩の2時間を除いて働き、夕食をとって1日を終わるという生活をしていった。残りは自由時間であるが、ユートピア人は、余暇を学問や研究に使っていた。しかし、仕事をしたくない人や働きすぎる人たちを監視する役職者もいたとされている。

モアは、すべての人たちが肉体的労働から解放され、精神的自由と啓蒙への時間をできるだけ多く与える社会を追求し、理想としていた。彼は精神的満足、第一義的で、最上位に位置するものとみていたが、肉体的満足を罪悪視したわけではない。人間の幸福のために、精神と肉体的満足への欲求と、両者間の調和を維持することが正常であるとモアは信じていた。

モアの著作をもう一つ挙げておきたい。「ピコ伝 Life of Picus」(1510: 澤田, 1987)で、モアは自分が理想とする人間像を描いている。イタリア出身のピコは、皇帝との関係を持つ家で生まれる。ピコは研究熱心で、あらゆる分野において優秀な国際人として登場する。知力、記憶力、財力(書物を買うための財力と強調されている)、勤勉さ、現世の物事への蔑視・無視が彼の5つの特徴として挙げられている。晩年のピコは、身分を捨て、お金を寄付し、家族でやっとならぬような小さな土地を持つ。死についての喜びを「わたしが罪を犯す余地はなくなるとわたしは信ずるからです」とキリスト教的に表現している。

モアはこのように、ピコという主人公を通じて自分の人生の意味を表現しようとしている。自らの思想を正当化させるためにも、ある理想像を立て、自分自身の人生がいかにかそれに近かったかを表現したかったのであろう。世俗的な無数の悪魔的誘惑を正面から受けとめるのではなく、小さな土地を耕し、そこで質素に生きるというピコの選択は、実は著者彼自身も実践にうつした考えである。しかし実際には、ユートピアという言葉と同じように、もしもピコのような人間が生きていたとしても、あまりにも完璧すぎて、人間性に欠けるといふ欠点からは逃れえなかったであろう。

モアのユートピアを理解する重要な鍵は、ヒューマニズムの世間観と考える。各時代の社会環境を反映した最適な欲求が認識され、その欲求の充足度に個人と全体としての社会の幸福がかかっているとすれば、ユートピア人の理想国家における、必要に応じて配分するという原則を考慮すると共に、我々は個人の精神的欲求を最大限満足させるという原則の第一義性を忘れてはならない。そこから、ユートピア人の理想として、幸福な社会にとって特徴的な自発的禁欲主義が生まれるのである。

「自然にしたがえ」ールソー

Jean-Jacques ROSSEAU (1712-1778)

17世紀末から18世紀にかけての西欧の知性の歩みには、「自然から社会へ」、または「自然から文化へ」という標語に集約される傾向がみられる。当時、人間の知性によって、悪しき自然状態を脱し、善き社会状態を創ることが、最高の目標になっていた。「自然から社会」が時代の合言葉であった。普及していたこの考え方に対して正面から否定したのは、「学問芸術論」におけるルソー（フランスの作家、思想家）であった。いうまでもなく、「自然へ帰れ！」がそのスローガンとなっている。

人間は自然状態においては、自由で幸福で善良であったが、自らの手で作った社会制度や文化によって、不自由で不幸な状態に落ち込み、邪悪な存在となり果てている。その中から真の人間の姿（＝自然）を見いだして、人間性を回復しなければいけない、という思想であった。人間性を主張したという意味では、ルソーはきわめて現代的でもある。都市に代表される社会システムは、それに適応できた人間と適応できなかった人間、すなわち勝者と敗者を識別することになる。それが都市進化論の現代バージョンなのかもしれない。

ルソーの言葉の中に当時の「自然」概念への批判が含まれていることは明確であろう。ルソーの考え方は当時の哲学者や百科全書家の機械論的な自然観に鋭く対立するものであった。彼は人間の内面的自然感情に注目している。自然と平和とが矛盾しない自然状態は、自然法や理性によって支配されていない状態であり、素

朴な自己への愛と他者への憐れみに充ちた牧歌的な平和郷と考えられている。

「自然へ帰れ」とは、当時の社会状態への批判をも含んでいる。自然状態は、悪しきもの、少なくとも不完全なものであり、それに対して、社会状態は、よきもの、より完全なもの、という関係をルソーは逆転させている。人間本来の姿をゆがめているその時代の社会や文化や宗教を激しく批判したルソーは人間性の回復を主張していた。彼によると社会状態とは、もともと自由なものとして生まれた人間がふたたび鎖につながれた状態となっている。

彼は、自然状態を、实在可能なコンディションとしてではなく、「もはや存在せず、おそらく少しも存在したことがない、多分将来も決して存在しないような状態」としてとらえていた。つまり彼は自然状態という理念を立てることによって、現実の問題を明らかにしようとしたのであって、決して「自然」に帰れといったのではない。

ルソーの「自然へ帰れ」は2つの側面から自然の見直しを意味している。まず、作り上げられた社会と自然界の共存について、地球環境の自然の基に帰るために社会を構成する構造や過程を、自然のそれらと対立しない状態を目指して、作り直す必要が迫っていること。もう一つは人間の内部自然に関するものであり、認知科学が対象とする領域であり、上述した人間性の回復と深く関係する側面である。現代社会の中でも、人間の「内部自然へ帰れ」の主張は有効であり、見直されるともいえる。

ロバート・オーエン

Robert OWEN (1771-1858)

1800年、オーエン（イギリスの社会主義者社会運動家・協同組合運動の創始者）は有名なニュー・ラナーク（“New Lanark”）工場の管理を引き受けている。18世紀の進歩の観念がもはやそのままの形では維持できなくなった時点、つまり産業革命およびフランス革命を経て、人間精神ないし社会の進歩が矛盾を重ねざるをえなくなった時点から、オーエンは出発している。オーエンのニュー・ラナーク工場における労働条件改善の努力、ニュー・ラナーク村における試みは、産業革命がもたらした労働力の価値の低下、豊かさが生み出した新しい貧困を解決しようとするものであった。彼の最大の目標は、新しい平等社会を建設することであった。

しかし既知のとおり、オーエンは失敗している。その原因としてまず、需要と供給のバランスを図るために一種の共産制的共同体の構想を試みたことがあげられる。孤立的閉鎖的に設定されたユートピア村内部のバランスは、実は、外部世界の価値変動に影響される結果

となったのである。

彼の失敗のもう一つの原因は、直接に投下された労働時間のみによって、労働の対価を決めようとする試みであった。なぜなら労働の対価は、価値法則の外に立つことができなかつたためである。オーエンは、エンゲルスおよびマルクス同様、人間の労働へのモチベーションを念頭に入れていなかったことが十分考えられる（徳永，1974）。

エンゲルスのユートピア否定

Friedrich ENGELS (1820-1895)

エンゲルス（ドイツの経済学者、哲学者、社会主義者、革命家、マルクス主義の共同創始者、共産主義的国際労働者運動の指導者）はマルクス Karl Heirich MARX (1818-1883) との緊密な協力のもとに新しい世界観・歴史観・革命理論の構築に励んだのであり、どこまでがかれの固有思想であるか確定するのは難しい。マルクスが経済学の方面、エンゲルスが自然弁証法（物事のとらえ・矛盾を全体的・具体的にとらえ、総合統一してより高い境域に到達する考え方）の方面を分担したともいわれているが、これらの部面でも両人はたえず意見の交換をおこなっていたのであるから、截然と分けるわけにはいかない。しかし、思想形成期にはエンゲルスの方が先導した面も認められる。

エンゲルスの「空想から科学へ」は社会主義思想とは別の流れであるサン・シモンからコントにかけて由来する実証主義の標語であり、十九世紀後半にはほとんど一般的となっていた価値観の表現であった。エンゲルスの著書普及の大きな一因として、当時盛んであったこのような価値観によって、社会主義思想が正当化されたということも指摘できる。同時に、社会主義と実証主義との、ある混交を引き起こしている（齊藤，1976他）ともいえる。

エンゲルスは、「ユートピア的」という言葉を、実現可能性の筋道についての認識を欠いた、たんなる空想的な願望像という意味で受け取り、それを否定的に評価している。ユートピアと科学との関係について、エンゲルスは実証可能性という観点から、たしかにユートピアを否定しているが、それはその空想的な態度に関してであって、理想社会についてのイメージの内容を否定しているわけではない。弁証法と実証法との共存、あるいは未分化の形での統一が、そこにあるように思われる。

合理性主義 ウェーバー

Max WEBER (1864-1920)

マックス・ウェーバー（ドイツの経済学者、社会学者）によれば、世界は昔から「魔術の園」のうちに閉鎖されていた。知性の歴史は、魔術の園から世界が解放さ

れていく「非魔術化」(die Entzauberung der Welt) の過程である。それは「理論的合理性」(合理的知識)ばかりではなく、また「実践的合理性」(生活態度、世界に対する働きかけの合目的な組織化)をも含んでいる。

なぜ西欧においてのみこの意味での合理化が進展し、人間の運命を規定する程までの力を持つようになったのか。歴史的に、合理的な知識・技術はむしろ、西欧以外のところに数多く見出されている。しかしそれらは発展を遂げてはいない（徳永，1974 生松他，1977）。

ウェーバーによる質問への回答は、合理的資本主義の発展に作用した宗教倫理はプロテスタンティズムにある。人々にとっては合理的禁欲は、神から与えられた命令である「職業」への献身という形をとる。その結果として、当然より多くの財を蓄積することになる。最後に宗教的動機から独立して、より能率的な仕事、よりよい経営を目指して、職業活動の合理的組織化が進められるようになる。プロテスタントにとって、それは意図せざる結果、意図とは逆の結果であった。こうしてプロテスタンティズムの宗教的倫理は、「資本主義の精神」の担い手となる人間類型を生み出し、彼らの手によって、合理的な近代資本主義が生み出されていく。言い換えると、価値合理的行為に代わって、形式合理的制度が歴史の主役となる。このプロセスのきっかけとなったのはビューロクラシーである。

ウェーバーの形式合理的制度は、ビューロクラシーと呼ばれている。その中では人間も巨大な機械装置の一つの小さな歯車になり、自由な責任ある主体の活動は抹殺されてしまう。「この世のどの機械装置も、この人間機械（ビューロクラシー）ほど精密には動かない。

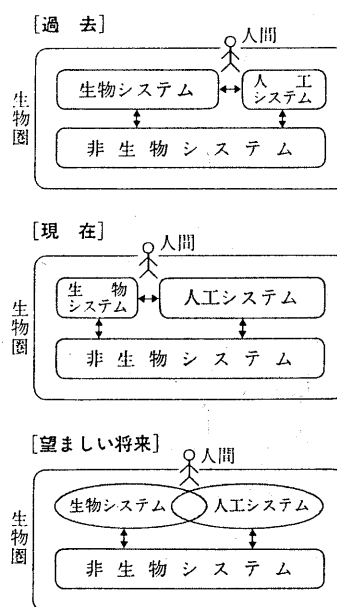


図1. 生物圏のサブシステム（鈴木，1991）

技術的・即物的な観点からすればこれを凌駕するものはない。問題は残された人間性と精神を、この機械化から、官僚制的生活理想の独占的支配から守るために、我々はこの機械装置に対して何を対置すべきか、ということである。しかしウェーバーが合理化を積極的に評価したのは、それが近代化を推める限りであった。つまり、合理性は人間の定立した目的・実質的価値に対する手段に止まっていたからである。

魔術からの解放の過程は、このような「神々との闘争」でもあった。しかし人間、とりわけ科学者は、さまざまな矛盾と緊張に充ちたこの世界を逃れてはならず、合理化された日常に耐えなければならない。「世界に意味を与えるのは人間であり、人間はその意味付与作業を通じてはじめて人間として存在しうる」。ユートピアを排し、価値判断を斥け、ひたすらウェーバーが、ありのままの世界の認識へ献身すればするほど、世界はその無意味さを白日の下に曝すことになる。

普遍的な合理化の過程は、ウェーバーにとって高次の「運命」という性格を帯びてくる。かれには、この運命を知的に克服する戦いがあった。しかしその戦いは、あらかじめ自己自身をいわば人質として敵にあずけての戦いであったのかもしれない。

上述の5人それぞれの考え方には、ある種の発展性が見られる。まず、ユートピアを発想したモアは、空想のユートピア島をイメージして思想を構築している。具体的な詳細までを述べることによって、彼はユートピアの価値を実証しようとしている。オーエンはさらに一歩進んで、自分で土地を購買し、小規模での実験を試みている。

ルソーはそれを一個人ではなく、社会という集団へと発展させ、フランス革命に強固な思想的バック・グラウンドを与えるまでに展開させている。エンゲルスは、現在でも大きく影響を与えており、再考の時期を迎えている現代社会の欠点を見いだす過程で、今後とも参考となる考察が指摘されている。最後のウェーバーは、資本主義体系のシステムが出来上がった時点での、理想の人間システムの働きに焦点を当て、ピューロクラティック機械の動き方を通じた合理性を追求している。

視点にもよるが、前述で定義したエコロジー思想につながるという意味では、これらの思想家はエコロジストだった。なぜなら当時自然界における資源の有効利用と社会との関係に対する彼らの批判には、基本的にエコロジー思想の要素が多く見られるからである。また、ルソーやウェーバーなどに見られる人間の視座からみた思想も、人間にはまだ可能性があることを信じて、母なる自然との関わり方について考察している。

彼らは自分たちの社会の問題を観察し、その延長線

に現代社会の諸状況を、部分的にしても、予測していたのではないか。人間が創造したシステムが、自然のそれと衝突し、対立することを念頭に、モアは自然との共生を、ルソーは人間の内部自然の評価を、オーエンはニュー・ラナーク工場を、エンゲルスらは労働者の利益を、そしてウェーバーは資本主義の合理性を主張したのであろう。彼らは変化の時代を生き、ふさわしいと思われた道を探り、人間と他のシステムとの共存について考えていたことがうかがえる。図1。(鈴木, 1991)を参照すると理解が容易と思われるが、自然の搾取が大規模に行われ始めた時期であり、周りの森林が顕著に姿を薄めてきた時代なのである。人間の肉体労働に関する不満が表面化し、労働の疎外が問題となりつつあった時代でもある。人間の構築したシステムがどんどん増大し、その代わりに生物システム、すなわち自然が後退していったのである(そのスピードと量的変化は現在の方が上回るかもしれないが、影響の大きさは勝るとも劣らなかったと推察できる)。

思想家は、当時の時代的状况で最もふさわしいと思われたユートピア像を描き出している。しかし、生み出された考えの中のいくつかは過去と位置づけることが出来る。モアの必要に応じて配分するという原則やオーエンの投下労働時間による対価決定も、現在の社会において機能できないことが明らかである。「必要」や「労働」の言葉でさえも、当時とは異なるニュアンスを表すようになっていく。モアの「必要」には、現在の「必要不可欠」に当たる意味が含まれている(この面において、意識していなかったにも関わらず、エコロジー思想に沿って考えていたともいえる)。さらに、当時の「労働」は極めて単純なものであったのに対して、現代社会では「労働」は多様化している。それは種類の問題だけでなく、質、量、技術、情報という新たな要素の影響もあって、労働の概念そのものが複雑化してきた。その「労働」もさらに国際的になり、国と国の壁を超えて異なった価値観の、異なった文化の国へと行き来するようになった。このような複雑な背景を考慮すると、労働時間のみでもってその対価を決定するという試みは、そのままでは今の社会に適應できないことは明らかである。

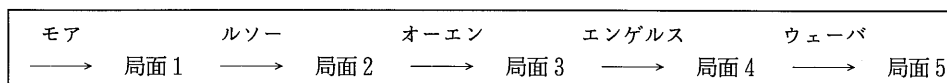
ユートピア論と現代企業経営

ユートピアはわれわれとは切り離れた存在のように見える。しかし視点を変えて考えてみると、前述した思想家たちが残した遺産は、現代においても生かされるべき内容を含んでいる。

効率性・機能性という名のもとで人間は常に自らの人工的スペース・人工的システムの拡大に動んできている。産業革命はこの事実の一つの表れである。いう

表1. 成長過程の5局面 (稲葉, 1979)

	局面1	局面2	局面3	局面4	局面5
経営の中心問題	生産・販売	操業の効率	市場の拡大	組織の統合	問題解決
組織構造	非公式	集権的・機能的	分権的・地域的	ライン・スタッフ ・製品グループ	革新的
トップの用いる経営管理様式	個人主義的・ 企業者の	指令的	委譲的	監視的	参加的
統制方法	市場効果	標準設定・ 費用中心点	結果報告・ 利益中心点	計画設定・ 投資中心点	合意的目標設定
管理者報酬	所有権	給与・成績昇給	個人賞与	利益分配・ 株式選択権	チーム賞与



までもなく、蒸気を利用した動力機械の発明、電気の発明などが大きく貢献した。手作業および肉体的労働から人間を解放し、より大きな規模の生産活動と共に、人間の生活レベルの向上が期待された。自然という宝庫から資源を獲得し、生産プロセスを通じて生み出されたモノは、人間生活をいかに便利にしてきたか。

しかし現在人間の行動を支えていると思われてきた人工的活スペース・人工的システムは、自然資源の存在を前提としており、人間活動が人間の存在に必要不可欠な水、空気、食糧にも悪影響が及んできている。

では、どのような企業がこれらの活動を起こしてきているのであろうか。現時点において、大規模な活動を行っている企業といえば、それは大企業である可能性が大きい。なぜなら大企業は活動の範囲が広く、海外にも至っているケースが多いからである。資源を多く利用し、多角化した事業を通じて世界各地で活躍しているに違いない。

しかし大企業の活動が『現時点』において著しいとしても、その将来性についてはどうなのか。将来の資源とエネルギーを消費し得る企業は、大企業だとは限らないのである。むしろ現時点で成長期にある企業こそ、未来に活躍する可能性が大きい。ここで企業の成長過程について考察する必要性が生じる。企業の成長段階の特徴については、稲葉(1979)が5局面をまとめている(表1)。

局面1 企業のコントロールは、市場からの直接のフィードバックによってなされ、経営管理者は顧客の反応にしたがった行動をする。新しい経営技術を導入するのに必要な知識と技能をもった強力な経営管理者が必要とされる。

局面2 機能別組織が導入され(製造機能と販売機

能の分離)、職務の割当が専門化してくる。予算制度や標準的な諸規則が設定される。

局面3 いっそう大規模化し、また多角化した複雑な組織をまとめるには多くの企業が採用する解決方法が、権限委譲なのである。トップからのコミュニケーションがさほど繁雑ではなくなってくる。

局面4 製品グループごとに組織の分権単位が作られる。資本支出計画については慎重にその重要性が審査され、組織内の各部に配分される。各製品グループは投資センターと見なされる、すなわちそこでは投下資本利益率が資金配分のための重要な判定基準となる。

局面5 局面5はチームという親密な小集団を通して、また個人間の差異の社会的な調整を通じて、組織行動のなかにいっそうの自主的な協働を導入しようとする。人間的環境のなかにおけるコントロールや自己規律が、規制によるコントロールよりも重視される。より良いチームワークの達成と組織内の対立解消のため、管理者に社会的・行動学的技能を修得させる教育プログラムが作られる。

成長過程における企業は各段階において経営の中心課題が変わるように、外部環境(自然環境を含む、企業の利害者集団の社会的環境)の変化適応するためには、その構造、経営管理様式、統制方法および報酬の与え方などの変更も必要となってくる。次の局面へ成長する際、「企業理念」のパラダイム変換が推進役となる。そこで、上述の思想家の考え方と対応させた局面変換パラダイムを考察する。

トマス・モア

正義ある共同社会、人間にふさわしい生活様式を理想としたモアだが、その実施方法として「労働」と「勉

学」を挙げている。現代企業でも製造業分野は、ホワイトカラーより、ブルーカラーの方が圧倒的に多い。企業を創造する際、規模が小さければ小さいほどに、企業内における人間関係が密接であるにも関わらず、「労働」だけが強調される面が存在する。そこで、企業成長には、労働者に勉強する機会を与えることが大切であることを、モアは教えてくれる。さらに、新たな企業活動の展開には自然環境との関連、企業自体の境界、そして地域への影響を配慮したり、従業員に企業の（すなわち自らの）アイデンティティーを理解させなければならない。モアの時代のように「手工業」に戻れとはいわないが、その背景にある考え方を現代流に解釈し、応用する意味は十分にある。

ルソー

人間は自然においては自由で幸福で善良であったが、社会が人間を再び鎖につながろうとしていると彼は考えた。そして人間の内部自然に注目し、それに期待した。1局目から2局目への段階に移行すると、企業は非公式的な組織から、階層的で効率的な組織を目指すようになる。そこでは人間の内的課題より、企業組織の成長目的に伴って、人間もある程度の犠牲をはらいながら、組織に貢献するようになる。ここでのルソーの「自然へ帰れ」とは、「組織は不完全な構造である」ということへの認識である。人間に無理な仕事をさせ、自由を「標準」の名の下に奪い、組織の効率を図ることの欠点をルソーは忠告しているのである。さらに、企業の不完全性を別の面からでも読むことができる。すなわち、効率の追求を重視するあまり、自然資源の経済的側面（外部不経済）のみに目を向け、自然資源の搾取・劣化をもたらす恐れの問題である。

効率性・経済性のために企業は、目標達成に「いらぬものを一方的に削除する」という作業を繰り返してきた。しかし、LCA（Life Cycle Assessment）の考え方に示される原料・生産・製品・廃棄のすべてにわたる環境配慮型生産システムは遅くともこの段階から導入されるべきである。

オーエン

2局面から3局面への成長プロセス、いわゆる市場拡大の過程の典型として、ある比較的豊かな国の企業の、（比較的豊でない）別の国への進出のケースがあげられる。豊かな国と進出先の国のどちらにおいても人間は自分にふさわしい最低レベルの生活を必要としている。平等な社会の理想を自分の体を張って実現しようとしたオーエンの思想は、各国の人々にこの最低レベルを保証すべきだという考え方を、非直接的ながら、影響したと思われる。これを現代企業の行動に反映させる具体的な方法として、調査段階において、企業進出

に関する現地住民の意見、自然環境に限らず現地社会や経済環境への影響、現地政府の考え方やその国の法律などについて、事前に知識を集めることがあげられる。

地球規模の環境問題などの発生と共に、人類の生存への道として挙げられているのは、人間が一種の共同社会に基づいて活動を行い、自国あるいは自分自身の利益のみを追求せず、地球上のすべての人々に正義が行き届くようなグローバルな思考をオーエンは提唱する。

エンゲルス

3局面から4局面への変化には、グループでの活動が目立つ。エンゲルスらの「共有」の思想とはつながるものがある。さらに労働に応じる報酬という古典的なやり方は、従業員個人の場合には使えない考え方だとしても、投下する資本の配分を計画する際の背景において、この考え方は生きている。企業活動は自由であっても、統制は中心的に、そして監視的に行われる。さらに自然環境問題に場面を写すと、現地で活動するユニットに環境保護の理念を与えるのは、本部であり、それを監視しながら見守ることの重要性をも読み取れるのである。

さらに、1992年9月28日の日本経済新聞に『儒教の共同体意思導入を』という富永健一の記事が載った。それによると、資本主義下での環境問題は「相互に競争している個々の企業はたとえ環境悪化をもたらすような行為と分かっている、もうけのチャンスと見ればやってしまった方がトクである。すべての企業が他者を信頼せず、利己的に行動した結果、自然が破壊され地球がダメになるのであり、そうなれば自分も競争相手も、地球とともに沈没してしまうほかはない。資本主義は共産主義よりも生き残った。しかし、環境問題の解決には、資本主義はうまく運営された場合の共産主義よりも不適合であると思う。なぜなら、うまく運営された場合の共産主義は、他者との間に同意意識があり、一致団結して行動できるはずだから、協力してパレート最適を選択できる公算が大きいからである。」

地球に関する問題に限らず、うまく運営された場合の共産主義は、資本主義社会に生きているわれわれに、資本主義の改善すべきところについてヒントを与えてくれているかもしれない。旧ソ連における共産主義の失敗は明らかであるが、その背景にあった共同体意識は世界の国々に欠けてる要素なのではなからうか。

ウェーバー

機械化されたシステムから人間を守ることは巨大なシステムにおいて小さな歯車にすぎない人間を自由にしたいという考え方に基づくのが、彼の思想である。4

局面から5局面の成長プロセスに限らず、組織成長のすべての段階において、制度と運用との乖離は、やがて悪しき官僚制の弊害を醸成する。問題の解決よりも手続きを守ることが重視され、革新は抑制される。要するに組織はもはや、公式的なプログラムや厳格な制度のみによって、管理しえないほど大規模かつ複雑なものになったのである。

機械が発明され、生産を目的とした企業が生み出された頃、その目的は小規模で行われていた諸活動のスケールを拡大することによる効率アップだった。大量生産は多くの人間に十分な数の品を作り出す方法である。しかし一つの望ましくない結果として、システム自体が過剰に強調されるようになり、本来の主人公であった人間がその立場を失ってしまったのである。それ以来、人間は機械のリズムを追いかけるかのように働いてきた。ウェーバーの問いは今の世の中に共通するものである。いかに人間をこの機械システムから守ることができるのであろうか。

考察—エコロジー思想と3k+j—

現在そして長期的にグローバルな地球環境問題を考えると、現代ユートピアへの道は選択できるほど多くはない。現代のユートピア論とは何であろうか？答えは、エコロジー思想の展開である。人間が人工的に作り出した不可逆的過程（企業の生産様式でも日常生活でも）を、自然に類似した循環可能なサイクルのプロセスへと変化させ、で資源・エネルギーを節約し、再利用する形をとることでもある。

現代ユートピアを目指した、エコロジー思考による企業や社会のパラダイム変換の担い手は、企業では理念の転換であり、社会では教育である。理念の変換と教育に期待される役割は次の3k+jにまとめることができる。

- k—関係→資源収奪・環境汚染などをもたらす自己主義的なビジネスを回避するため、内外の政府、企業、地域住民、研究教育機関との連携がポイントとなり、それらの機関の相互関係を作り出す役割。(Relations)
- k—研究開発→技術の分野では新素材開発やLCA（ライフ・サイクル・アナリシス）によるプロセス開発。また、環境問題に取り組むために今後の需要が増大すると思われる人材の開発。(Development)
- k—監視・関心→中立的な立場で、政府の目が届かない場所での企業監視、明確になった問題の解決、現地社会住民のコオペレーションを促すためにこれらの情報のディスクロージャーの確立。(Observation)
- j—情報の発信→各国間・企業間で問題解決法をオープンにし、だれでもがアクセスできる「データ・ベー

ス」による地球型問題解決情報の共有。(Information)

もちろん、これはあくまでもユートピアに向けた発想であり、このような地球社会が可能であるという確信を持っているとはいえない。しかし、先進国の企業間で現在問われているディスクロージャー、さらに課題になっている企業の倫理的な立場について考えると、少なくとも方向性は正しいといえよう。その動きの一つを紹介しよう。インターネットは現在、各国の大学を中心に世界を結んでいる。そこから流れる情報は、例外を除いて、「著作権」を主張していない。情報は自由に、国から国へと、各国のコンピューター経路を借りて、パイプを通りぬけるようになってくる。各国の人たちが自らの意見を話すいくつかの場はすでにできており、各分野でのディスカッションを行うことも可能になっている。

歴史的に展開を見せたユートピア論は、地球環境問題を抱える現代社会とその推進役としての企業に、そしてわれわれ現代人に、多くのメッセージを送られている。そして、現代ユートピア論は、エコロジー思考として確実に再生している。

追記 注釈としてなぜ[k]を小文字にしたのかについて説明しておきたい。まず「汚い・危険・きつい」の3Kからの区別を試みたからである。そして主な理由は、上述の「関係・開発・監視・情報」の規模にある。3k+jの規模は大きくなればなるほど、よいというわけではない。小さな関係が多く存在し、各関係が密接に働いているとすれば、エコロジー的に考えても、少なくとも重要とされる役割を果たし得るであろう。小さな開発が多く行われ、その使いやすいバージョンがインターネットを通じてだれにでも入手可能な形におけば、その情報が人類に貢献したことになる。

さらに「共生」について注釈を加えておきたい。「共生」は通常、平和な共生を連想させる。しかし、自然の共生はそれとはまったく違い、ダイナミックで、階層間および階層内での厳しい競争を含むものである。生物学では主に3つの共生が研究されている。すなわち、相利共生(Mutualism)、片利共生(Commensalism)、そして寄生(Parasitism)がそれぞれある。人間は今までの行動を通じて、ほとんどの場合、寄生的な共生、自らの利益しかを考える”共生”を目指してきた。今後は、本当の意味での相利共生が求められている。

引用文献

- ブルムウェル, A. 1982. エコロジー—起源とその展開(金子務監訳, 1982). 400pp. 河出書房新社.
- オシノフスキー, I. N. 1990. トマス・モアとヒューマニズム—16世紀イギリスの社会経済と思想(稲垣敏

- 夫訳). 248pp. 新評論.
- マンフォード, L. 1984. ユートピアの系譜—理想の都市とは何か (関裕三郎訳). 321pp. 新泉社.
- 稲葉元吉. 1979. 経営行動論. 302pp. 丸善.
- 佐伯啓思. 1993. 近代化とイデオロギーの終焉. 「岩波講座社会科学の方法第Ⅱ巻」, 221-254. 岩波書店.
- 斎藤 稔. 1976. 社会主義経済論序説. 237pp. 大月書店.
- 生松敬三・木田 元・伊東俊太郎・岩田靖夫. 1977. 西洋哲学の基礎知識. 306pp. 有斐閣.
- 徳永 恂. 1974. ユートピアの理論. 279pp. 河出書房新社.
- 立花 隆. 1971. 思考の技術—エコロジー的発想のすすめ. 212pp. 日本経済新聞社.
- 鈴木邦雄. 1991. エコマネジメント入門. 254pp. 有斐閣.
- モア, T. 1510. Life of Prcus (ピコ伝). 「ユートピアと権力と死: トマス・モア没後四五〇年記念」(澤田昭夫監修, 日本トマス・モア教会編, 1987). 荒竹出版.